

# カトマンドゥ盆地における生き神信仰<sup>1</sup>

—多宗教・多民族共存の象徴としての

「ロイヤル・クマリ」—

山口しのぶ

## はじめに

現在ネパールの人口は約2,649万人であり<sup>2</sup>、そこにはネパール人、ネワール人、タマン人、マナン人、グルン人など多くの民族が住んでいる。ネパールの政治、社会、文化の中心地であるカトマンドゥ盆地では、古くからヒンドゥー教と仏教が信仰されている。カトマンドゥ盆地においては、チベット・ビルマ語系のネワール語を話すネワール人たちが古くから都市文明を築いてきた。ここでは、「クマリ」(Kumari) と呼ばれる生き神に対する信仰が有名である。「クマリ」とは、ネワール人の幼い少女から選ばれた生き神である。クマリに選ばれた後、その少女は旧王宮近くの館に暮らす。初潮を迎えるとクマリの任務は終了し、彼女らは自身の家庭に戻る。クマリは、ネパールのヒンドゥー教徒たちからは女神ドゥルガーおよびかつての王家の守護女神タレジュ (Taleju) と同一視されるとともに、仏教徒たちからはヴァジュラ・デーヴィー (Vajradevī, 後期密教の男尊チャクラサンヴァラの妃ヴァジュラ・ヴァーラーヒー Vajravārāhīを指す) として崇敬される。またインドラ・ジャートラ (Indra Jātra) の祭において、クマリを中心とした山車巡

<sup>1</sup> 本稿は、2014年10月24日インドネシア、バリ島デンパサールのInstitut Hindu Dharma Negri, Denpasarで開催された国際セミナー*Respect for Religious Pluralism and Multi-cultural*での発表資料(英文)の内容に加筆・修正を加えたものである。

<sup>2</sup> 2011年の統計。外務省ホームページ「ネパール連邦民主共和国基礎データ」を参照した。<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nepal/data.html#section1> (2015年10月15日閲覧)

行が行われ、かつては歴代の国王が彼女にひざまずき礼拝した。本稿においては、このクマリ信仰、特に王家の守護神としての「ロイヤル・クマリ」(王家のクマリ)を取り上げる。ネパールのクマリの研究は数多くなされており<sup>3</sup>、本稿ではそれらの先行研究をもとにクマリ信仰を概観するとともに、カトマンドゥ盆地の歴史におけるクマリの宗教社会的な機能について考察したい。

## 1. カトマンドゥ盆地におけるヒンドゥー教と仏教の歴史

前述したように、生き神クマリはヒンドゥー教徒にも仏教徒にも信仰されている。本節では、ネパールにおけるヒンドゥー教と仏教の歴史を概観しよう。ネパールの歴史は大まかに以下の6つの時代に区分される。

- (1) リッチャヴィ王朝時代以前 (紀元5世紀以前)
- (2) リッチャヴィ王朝時代 (紀元5～9世紀)
- (3) リッチャヴィ王朝からマッラ王朝への移行期 (紀元10世紀～11世紀)
- (4) マッラ王朝時代 (紀元12世紀～1768年)
- (5) ゴルカ王朝成立・ラナ家支配・王政復古時代 (1768年～2008年)
- (6) ゴルカ王朝の廃止以降ネパール連邦民主共和国の時代 (2008年～現在)

リッチャヴィ王朝以前には、ネパールの中心地であるカトマンドゥ盆地を先史時代から東インドからのキラータKirāta族が支配していたとされる。ヒンドゥー教や仏教が明確な形で登場するのは、次のリッチャヴィ王朝期である。リッチャヴィ朝の諸王はヒンドゥー教徒であったが、同時に仏教も保護した。例えば4～5世紀のブリシャ・デーヴァBriṣa Deva王はカトマンドゥ市北西部のスワヤンブーの地に仏教寺院を建立したとされる<sup>4</sup>。また7世紀のアンシュヴァルマンAṃśuvarman王<sup>5</sup>はシ

<sup>3</sup> クマリ信仰の起源、現在のクマリ信仰、クマリとネパール仏教との関連等に関しては(サキヤ 2014)に詳しい研究があるので参照されたい。

<sup>4</sup> (田中・吉崎 1998: 17-18)

<sup>5</sup> (佐伯 2003: 99)によれば、アンシュヴァルマンは公式文書の布告文で一度も「王」と名乗らなかったとされるが、事実上王の機能を果たしていたと考えられる。

ヴァ神の信者であり、シヴァ神を祀るパシュパティ・ナート寺院等主要なヒンドゥー寺院に金銭を提供するいっぽう、カトマンドゥ盆地の仏教寺院も保護した<sup>6</sup>。この時代のカトマンドゥ盆地には、ヒンドゥー教のシヴァ派、ヴィシュヌ派、上座部仏教、大乘仏教、密教が併存していたと考えられる。リッチャヴィ王朝下のカトマンドゥ盆地では、前述のネワール人たちが文明を築いていた。彼らの中には、ヒンドゥー教徒と仏教徒が混在していた。

9世紀に滅亡したリッチャヴィ王朝の後、デーヴァ王族の支配を経て、カトマンドゥ盆地は12世紀にはマッラ王朝に支配された。中世前期にあたる14世紀の王ジャヤ・ステティ・マッラ（在位1382-1395）は、ネワール人の社会を種姓（カースト）制度に組み込み、彼らの職業や生活様式について細かく規定を設けた<sup>7</sup>。こうしてネワール人社会においては、現在もヒンドゥー教徒のみならず仏教徒にもカースト制が機能している。

中世後期に入ると、カトマンドゥ盆地はカトマンドゥ、パタン、バクタプールの三国に分裂し、互いに覇権を争う時代となった。この時代のカトマンドゥ王国のプラターパ・マッラPratāpa Malla王（1641-1674）は諸宗教に寛容で、キリスト教のイエズス会の神父のカトマンドゥ滞在とキリスト教の布教を許可した<sup>8</sup>。またバクタプール王国のジャガッジョーティル・マッラJagajjotir Malla王（1613頃-1636頃）は、自身が建設した人工池をバヴァーニー女神に寄進し、ネワール人の仏教徒からタレジュ女神としての生き神クマリを選ぶ慣例を始めたとも言われる<sup>9</sup>。（これに関しては諸説あり、本稿4でそれらについて言及した。）このように古代から中世の王たちは、ヒンドゥー教以外の異宗教にも寛容で、ヒンドゥー教と仏教は激しく対立することなく共存していた。

<sup>6</sup>（佐伯 2003：102）

<sup>7</sup>（佐伯 2003：321）

<sup>8</sup>（Majupuria T.C. & Majupuria R.K 2004：23）また同王がカトマンドゥ王国とチベットとの通商協定を結び、その結果両国の交易が活発化した。交易の主な担い手であったネワール仏教徒の商人カーストが交易とともに仏教関連の情報を持ち帰った。（山口 2005：5）（山口 2010：206）参照。

<sup>9</sup>（佐伯 2003：369）

カトマンドゥ・マッラ朝最後の王であるジャヤブラカーシャ・マッラ Jayaprakāśa Malla (第1期在位1736-1746、第2期在位1750-1768)の時代、ネパールの諸民族の一つであるゴルカが強力となった。ゴルカのプリティヴィ・ナラヤン・シャハ Prithivi Narayan Shah は1768年9月インドラ・ジャートルの祭の時にカトマンドゥに攻め入り無血開城し、カトマンドゥ王国を滅ぼした。その後、ゴルカのシャハ王朝は宰相ラナ家の統治を経てギャネンドラ国王の時代まで続いたが、2008年王政が廃止され、ネパールは連邦民主共和国となった。このような歴史の中で、カトマンドゥ盆地ではヒンドゥー教と仏教は現在もポピュラーであり、寺院における宗教活動がさかんに行われている。

## 2. カトマンドゥ盆地の女神信仰

先に述べたように、生き神クマリはヒンドゥー教の女神ドゥルガーと同一視されている。インドを中心とする南アジアの女神信仰は、紀元前1500年頃からのブラーフマニズム（バラモン中心主義）の時代以前にその起源を持つと考えられる。インダス文明の遺跡で出土した女神像は大きな胸や尻を持ち、これらは豊饒をイメージするものと思われる。ヴェーダ聖典などブラーフマニズムの諸文献にも女神は男神の妃として登場するが、女神崇拜が顕著な形をとって現れたのは紀元600年以降であるとされる<sup>10</sup>。

紀元6世紀頃の成立とされる『女神の偉大さ』*Devīmāhātmya*においては、女神ドゥルガーのエピソードが述べられる。そこにおいては、ドゥルガーは男神たちにより生み出され、男神から譲り受けた武器を手に水牛の姿をとる魔神マヒシャ・アスラを殺す女神マヒシャスラ・マルディニー Mahiṣāsūramardīnī として描かれている。またドゥルガー女神を助けて魔神の軍勢と戦う女神たちとして、カーリー女神や七母神 (saptamātṛkā) も登場する。『女神の偉大さ』に登場する七母神はヒンドゥー教の7名の男神の妃と考えられており、ブラフマーニー (Brahmānī)、ルドラーニー (Rudrānī)、ヴァイシュナヴィー (Vaiṣṇavī)、

<sup>10</sup> (立川 2008 : 228)

カウマーリー<sup>11</sup> (Kaumārī)、ヴァーラーヒー (Vārāhī)、インドラニー (Indrānī)、チャームンダー (Cāmuṇḍā) の7名である<sup>12</sup>。これら男神の妃としての女神は「シャクティ」(śakti) と呼ばれ、シャクティは男神にとっての性的なエネルギーを意味する。

以上に述べた女神たちは、カトマンドゥ盆地でも非常にポピュラーである<sup>13</sup>。カトマンドゥ市内にあるバドラ・カーリー寺院や市郊外のダッキン・カーリー寺院など、カーリー女神を祀る寺院も多く、それらの寺院ではヤギなどの動物犠牲が捧げられ、女神像にその血が振りかけられる。またカトマンドゥ盆地では、前述の七母神にマハーラクシュミー<sup>14</sup> (Mahālakṣmī) を加えた八母神 (aṣṭamātrkā) が良く知られており、八母神はカトマンドゥ盆地の東西南北とその間の八方位を守護する女神とされている。カトマンドゥ盆地で盛んに信仰される女神バガヴァティーはドゥルガーと同一視され、カトマンドゥ市内にあるショーバー・バガヴァティー Śobhā Bhagavatī 寺院の入口には、水牛の魔神を殺すドゥルガー女神の絵が描かれている。このようにカトマンドゥ盆地の女神は、血を好む恐ろしい存在であるとともに、盆地を守る役割も担っている。

ところで、カトマンドゥ盆地においてドゥルガー女神と同一視されるバガヴァティー女神を本尊とするいくつかの寺院には、仏教との関連を示す特徴を見出すことができる。カトマンドゥ市内のショーバー・バガヴァティー寺院などでは、寺院内部に古い仏塔(ストウーパ)が見られる<sup>15</sup>。

<sup>11</sup> シャキヤ (2014 : 302-303) は、クマリとカウマーリー女神との同一視について言及している。

<sup>12</sup> 順にブラフマー、ルドラ (シヴァ)、ヴィシュヌ、クマラ、ヴァラーハ (ヴィシュヌの化身)、インドラ、ヤマの妃とされる。

<sup>13</sup> 本節に述べた女神以外にも「九名のドゥルガー」(navadurgā) も知られる。

<sup>14</sup> マハーラクシュミーの夫は不明であるが、カトマンドゥ盆地では8種のバイラヴァ (シヴァの畏怖相) が知られており、八母神と八バイラヴァが対になる場合がある。立川 (1990 : 196) はペーラチェン・ウルマンタ・バイラブ寺院の八バイラヴァと八母神の対応を挙げており、そこではマハーラクシュミーはサンハーラ・バイラヴァと対応する。

<sup>15</sup> この寺院では、本堂の前方に四仏を配した仏塔があり、本堂の裏面が2つの仏塔となっている。この寺院はかつて仏教寺院であったものが、バガヴァティー女神の寺院に変わったものと推測される。

またカトマンドゥ盆地の南東部にあるパラチョーク・バガヴァティー寺院は、仏教徒によって管理がなされている<sup>16</sup>。これらの寺院は現在あくまでもヒンドゥー教寺院として機能しているが、ネパールの歴史の中におけるヒンドゥー教の女神信仰と仏教との密接な関わりを示す例と言えるだろう。

マッラ朝期から、歴代の王たちは「タレジュ」と呼ばれる女神を王家の守護神として崇拝してきた。現在でもカトマンドゥ、パタン、バクタプールの三都市の旧王宮広場には、タレジュ女神を祀る寺院がそれぞれ残っている。タレジュは「タレジュ・バヴァーニー」(Taleju Bhavānī)とも呼ばれ、南インドやデカン地方で礼拝される「トゥラジャ(もしくはトゥラザ)・バヴァーニー」(Tulaja Bhavānī)と同一の女神である。この女神が最初にカトマンドゥ盆地にもたらされたのは14世紀のティルフット王国(現在のインド、ビハール)のハラシンハ・デーヴァであるとする<sup>17</sup>。

### 3. カトマンドゥ盆地における生き神クマリの信仰

冒頭に述べたように、カトマンドゥ盆地では、「クマリ」と呼ばれる少女の生き神に対する信仰がある。ネパール人の2、3歳の少女がクマリに選ばれ、初潮を迎えるまで数年間を女神クマリとして過ごす。サンスクリットで'kumārī'は「少女、処女」を意味し、'kumari'はそのネパールでの発音である。クマリには「ロイヤル・クマリ」すなわち王家のクマリでありネパール全体で崇拝されるクマリと、「ローカル・クマリ」すなわち特定の地域のみで礼拝されるクマリの2種がある<sup>18</sup>。2で述べ

<sup>16</sup> カトマンドゥ市の仏教僧ガウタマ・ラトナ・ヴァジュラーチャールヤ氏のご教示による。

<sup>17</sup> (Allen 2000:194) 参照。また佐伯(2003:279)は、この王は守護神トゥラジャ・バヴァーニー(タレジュ)女神からネパールに入るようにというお告げを受け、1323(もしくは1324)年にこの女神を奉じてネパール入りしバクタプールに首都を定めて統治したという記述が王統譜にあるが、史実とは異なるとしている。

<sup>18</sup> (Allen 2000:189-191)には1976年当時のロイヤル・クマリを含むカトマンドゥの4名、パタン(2名)、バクタプール(3名)、デオパタン(1名)、ブンガマティ(1名)が挙げられている。

たように、中世後期カトマンドゥ盆地はカトマンドゥ、パタン、バクタプールの3つの王国に分かれており、その三国にそれぞれロイヤル・クマリが存在していたが、現在ロイヤル・クマリの役割を果たすのはカトマンドゥのロイヤル・クマリのみとなった<sup>19</sup>。カトマンドゥのロイヤル・クマリはマッラ王朝下で崇拝されていたが、マッラ王朝崩壊後ゴルカのシャハ王朝下にあっても、その王家の守護神として崇拝され続けてきた。

カトマンドゥ市の中心部、旧王宮広場には「クマリ・チョーク」(Kumari Chowk) と呼ばれるロイヤル・クマリの住居がある。ロイヤル・クマリの選出にあたっては、クマリ候補は「32の完全さ」を備えていなければならないとされる。「32の完全さ」とは、形の良い爪、長いつま先、アヒルのように筋の通った脚、ライオンのような胸、ほら貝のような首、小さな舌、牛のようなまつ毛、バニヤン樹のような体つきなどである<sup>20</sup>。ロイヤル・クマリの選出は「ダサイン」(Dasain) もしくは「ドゥルガー・プージャー」と呼ばれる、ドゥルガーが悪魔に勝利したことを祝う祭の期間に行われる<sup>21</sup>。この祭では、多くの水牛やヤギが犠牲として捧げられる。ロイヤル・クマリの選出においては、またこのような首を切り落とされた犠牲獣を見ても恐れた様子を見せないこともその条件である<sup>22</sup>。その後選ばれた少女は秘密の儀式をうけ、タレジュ女神をその身体の中に宿すと考えられている<sup>23</sup>。

クマリはヒンドゥー教のドゥルガー女神と同一視されるが、この生き

<sup>19</sup> しかしながら、パタンのHa Baha寺院のクマリは「旧ロイヤル・クマリ」としてパタン市民に信仰され、またバクタプールの「エーカーンタ・クマリ」はかつてのバクタプール王国のロイヤル・クマリとして現代のダサイン祭の時にはバクタプール市民に礼拝を受けるという。(Allen 2000 :190-191)

<sup>20</sup> (Amatya 1998 :73) Allen (2000 :196) は「32の完全さ」のリストを挙げ、また病気でないことも条件として述べている。

<sup>21</sup> ダサイン祭に関しては (Anderson 1988 :142-155) 参照。また (前田 2009) は、パタンの旧ロイヤル・クマリが関係するハク・バハおよびムール・チョークのダサイン祭について詳述している。

<sup>22</sup> (Amatya 1998 :73)

<sup>23</sup> (Nepali 1988 :312) 参照。Allen (2000 :198) はパタンのロイヤル・クマリの儀式について詳述している。ロイヤル・クマリはヒンドゥー教の一連の儀式の後、仏教僧によりヴァジュラ・デーヴィーとして礼拝される。

神は必ずネワール仏教徒から選出される。2で述べたように、14世紀ネワール社会はカースト制度に組み込まれ、仏教徒もカーストを持つこととなった。現在ネワール仏教徒社会には5つの階級がある<sup>24</sup>。それらのうち最も上位のカーストが世襲制の僧侶カーストであり、「ヴァジュラーチャールヤ」(Vajrācārya)と「シャーキヤ」(Śākya)の2つのサブ・カーストからなる。両サブ・カーストとも「バレ・シグ」(Nw. Bare chuyegu)と呼ばれる修行僧への入門儀礼を行うが、ヴァジュラーチャールヤのみが、その後密教僧の資格を得るための儀礼「アーチャー・ルエグ」(Nw. ācāḥ luyegu, Skt. ācāryābhiṣeka、阿闍梨灌頂)を受ける。多くの場合、クマリは前者のシャーキヤの家庭から選ばれる<sup>25</sup>。ネワールのヒンドゥー教徒にとってクマリはドゥルガー女神であり、ネワール仏教徒にとっては後期密教の仏チャクラサンヴァラの妃ヴァジュラ・デーヴィーと考えられているが、クマリはまたヒンドゥー教徒であった王家の守護神タレジュとも同一視される。生き神としてのクマリ信仰は、これら三者の重層的な象徴性を備えている。処女神クマリの信仰と、タレジュの信仰とは元来別の伝統であり、のちに一つの信仰として統合されたと考えられる。またクマリは仏教の女神ヴァジュラ・デーヴィーと同一視されることにより、ネワール社会でポピュラーな二つの宗教の橋渡しの役割をも担ってきた。

カトマンドゥ盆地における生き女神としてのクマリ崇拜の歴史は明らかでない。Allen (1996: 14-15) は、生き神クマリ崇拜の起源についての確実な意見はないが、インドのパンジャーブ地方における事例と同様に、ネパールにおいても小さな範囲のローカルな儀礼であったという可能性を指摘している。またAllenは、11世紀のラクシュミー・カーマデーヴァLakṣmī Kāmadeva王 (1024頃～1039頃) がクマリ信仰に熱心であった事に注目し、当時北インドやネパールでヒンドゥー教、仏教ともにタントリズムが盛んであり、クマリ信仰の導入がタントリズムと関連性が

<sup>24</sup> ネワール仏教徒のカーストについては (Gellner 1992: 41-49) (山口 2005: 8-9) 参照。

<sup>25</sup> Allen (2000: 190) は、パタンの旧ロイヤル・クマリの出身がヴァジュラーチャールヤだったことを例に挙げ、クマリが常にシャーキヤ出身とは限らないとしている。

あったのではないかと述べている<sup>26</sup>。いっぽう、王家の守護神としてのタレジュ女神の信仰は、最初にバクタプールに紹介された。15世紀以降カトマンドゥ盆地ではバクタプールからカトマンドゥが独立、さらにパタンがカトマンドゥから独立する形で三国に分裂した後、カトマンドゥとパタンに相次いでタレジュ寺院が建立された<sup>27</sup>。カトマンドゥ盆地におけるタレジュ女神の顕現としてのクマリ崇拜に関し、Amatya (1988 : 63) は以下の伝説を挙げている。

ある時トライローキヤ・マツラ Trailokya Malla王 (1560-1613) が、夢の中でタレジュ女神の化身であるクマリに、ダイヤモンドのヤントラ (女神を象徴するダイヤグラム) を作り、それを特別な方法で礼拝するならば、彼女が目の前にあらわれて話をしてあげようと言った。トライローキヤ王が言われた通りにしたところ、クマリが人間の姿で王の前にあらわれた。彼らは常に一緒に話をしながらダイス・ゲームに興じていたが、クマリは「ある者がヤントラを偶然見てしまったら、自分は人間の姿では二度と王の前にはあらわれなくなるだろう」と言った。あるとき王の娘のガンガー・デーヴィー王女がたまたまヤントラを一目見てしまったところ、クマリは姿を消してしまい王の元には二度とあらわれなくなった。

またAmatya (1988 : 63-64) は、今一つの話も挙げている。

カトマンドゥ・マツラ王朝最後のジャヤプラカーシャ・マツラ王の時、クマリが夢の中で王の前にあらわれ、彼女は王とともにダイス・ゲームをするが、その時にはカーテンがかかっている所以她の手しか見てはいけない、と言った。ある日ジャヤプラカーシャ王が人間の姿であらわれたクマリ女神とダイス・ゲームをしていたとき、偶然王はクマリの手に触れてしまった。あまりに美しい手だったので、王は性的な欲求に負けてしまった。それに気づいたクマリは怒って王を突き飛ばした。その後、大いに後悔した王があまりに嘆いたので、クマリは王を憐れみ彼女は仏教徒のシャーキャの少女

<sup>26</sup> Allenはまたラクシュミー・カーマデーヴァ王が、インドラ・ジャートラなどカトマンドゥ盆地の主要な祭を作ったと述べている。

<sup>27</sup> (Allen1996 : 17-18)

の体内に入るだろうと言った。しかしこの話を忘れてしまった王は、タレジュ女神とクマリが身体に憑依したシャーキヤの少女を侮辱し、また財産を没収してしまった。クマリ女神はこれに激怒し、夢で王の前にあらわれ、自分がシャーキヤの少女の身体に入ったことを告げた。王はこれ以降クマリでありタレジュであるシャーキヤの少女を崇拝するようになり、クマリはシャーキヤの少女に受け継がれていくことになった。

以上の話によれば、王家の守護神タレジュとクマリの結び付きが、前者では16世紀～17世紀初めのバクタプール国王トライローキヤ・マツラ王の時代、後者の話では18世紀のカトマンドゥ・マツラ王朝最後のジャヤプラカーシャ・マツラ王の時代に帰されている。(Allen 2000 : 192-193) にも後者と同様の話があるが、Allenはクマリとタレジュの結びつきについて以上の2人の王のほかにも、17世紀のパタン王、シッディナラシンハの時代の可能性も示唆している。また1で述べたように、佐伯(2003 : 369)は17世紀のバクタプール王、ジャガッジョーテイル・マツラ王の時代であると述べている。このように、タレジュとクマリの結びつきがなされた時代については複数の王朝が推定されるが、いずれにしても15世紀以降のマツラ朝において三国が併存していた時代であると考えられる。

以上に述べたうち後者の話には続きがあり、それは次のようである<sup>28</sup>。

生き神クマリは、その後ジャヤプラカーシャ王とは良い関係にならなかった。ある日生き神は王に、彼の治世は終焉をむかえるだろうと予言した。この予言は王の心にあまりに深く刻まれたので、王は生き神クマリ、ガネーシャ、バイラヴァを山車にのせて巡行を行うことを決心した。また王宮とは別にクマリのための住居を建てることを約束した。その結果、生き神クマリは王があと12年長くカトマンドゥを統治できるだろうと言った。1756年以降クマリの山車巡行が行われ、そこでは国王は生き神クマリに礼拝をおこなった。

インドラ・ジャートラ祭において初めてクマリの山車巡行を開催した

<sup>28</sup> (Amatya 1998 : 63-64)

のは、ジャヤプラカーシャ・マツラ王と言われる<sup>29</sup>。次節においては、インドラ・ジャートラ祭におけるロイヤル・クマリの役割について述べよう。

#### 4. インドラ・ジャートラ祭における ロイヤル・クマリの役割

インドラ・ジャートラ (Indra Jātra) 祭は、毎年9月頃に行われる。'jātra'は、「旅」を意味するサンスクリットの'yātra'に由来する語であり、「インドラ・ジャートラ」は文字どおりには「インドラ神の旅」という意味である。ネパールの伝説では、かつてインドラは「パーリジャータ」(pārijāta) という花を好んでいた。パーリジャータはカトマンドゥ盆地に豊富に生えているが、天界では手に入らない。ある日インドラの母親が儀式のためにこの花を欲しがったので、インドラは人間の姿をしてカトマンドゥ盆地に降りて行った。彼が花を盗んだ時、盆地の人々は彼がインドラとは気づかずに、泥棒だと思い手足を縛った。まもなくインドラの母親が息子を捜しに天界からカトマンドゥ盆地に降り、盆地の人々は誰が地上に降り、囚われてしまったのか理解した。人々は彼らを歓迎し、インドラたちは一週間巡行した<sup>30</sup>。

インドラ・ジャートラはネワール暦のヤンラー (yañlā) 月 (インド、ネパールで使用されるヴィクラム暦ではバードラパダ月に相当する) の白分第12日に始まり、同月の黒分第4日まで続く。この祭はこの年に亡くなった人々のために行われるとも考えられており、またインドラ・ジャートラの初日には、インドラ・ドゥバジャ (Indra Dhvaja) と呼ばれる、インドラの旗がついた柱を建立する祭が行われる。その後一年以内に家族が亡くなった者たちによる死者供養、インドラの母に対する儀礼などが行われる。神話ではインドラの母親は囚われた息子を解放するため豊かな収穫をもたらす秋と冬の期間の霧と露を約束したとされ、この祭はまた豊富な実りのための儀礼でもある。また期間中は神々や悪魔

<sup>29</sup> (Anderson 1988 :132)

<sup>30</sup> (Anderson 1988 :127)

たちの仮面舞踊劇が行われる<sup>31</sup>。

第3日の夜、クマリの山車巡行が始まる。ロイヤル・クマリは山車に乗りクマリの館からカトマンドゥの旧王宮広場を出発する。この巡行はアサン・チョーク、インドラ・チョークなど重要な旧市街の歴史地区を回り、クマリの館に帰ってくる。この巡行にはネパール中から多数の人々が集まり、彼らの前に現れたクマリに向けて殺到する。最終日に追加の巡行が行われ、クマリは国王の額に祝福のティカ（赤い粉のマーク）を付ける。この行為は国王に翌年の国の統治を行う権利を与えることを象徴的に示したものである<sup>32</sup>。インドラ・ジャートラにおけるこの一連のクマリの山車巡行は、カトマンドゥ・マッラ王朝最後のジャヤプラカーシャ・マッラにより開始され、2008年王政が廃止される以前のネパール最後の国王、シャハ王朝ギャネンドラ・ビール・ビクラム・シャハまで続いた。

## 5. 考察—ロイヤル・クマリの宗教社会的機能

これまで述べてきたように、カトマンドゥ盆地においては古くからヒンドゥー教と仏教が共存してきた。そのような状況で、両宗教のシンクレティズムを示すと思われるようないくつかの現象が見られる。例えば、カトマンドゥ盆地のいくつかの寺院の本尊はヒンドゥー教徒にも仏教徒にも崇敬を受ける。そのような寺院の最も著名な例は、カトマンドゥ市アサン地区にあるジャナ・バハ (Nw. Jana Baha) である。ジャナ・バハの本尊は白色の観音であるが、この本尊は北インドのヒンドゥー教の聖者マツェンドラナート Matsyendranāth とも考えられており、この寺院はまた「セト (白)・マツェンドラナート」とも呼ばれる。また、ヒンドゥー教のシヴァ神の妃パールヴァティーの象徴であり女性器をかたどったヨーニの台座の上にブッダの象徴としての仏塔が建てられている例も、ネワール仏教の総本山であるスワヤンブーナート寺院を始めと

<sup>31</sup> インドラ・ジャートラ祭の内容については (Anderson 1988 : 128-137) (田中・吉崎 1988 : 224-225) 参照。

<sup>32</sup> (Anderson 1988 : 133) (田中・吉崎 1998 : 225)

して多くの仏教寺院で目にすることができる。

さてクマリ女神の信仰は、ネパールではローカルな信仰を起源とすると考えられる。しかしながらクマリ崇拜は、ヒンドゥー教の代表的な女神ドゥルガー、および歴代のネパール王家の守護神であったタレジュ女神としてポピュラーな存在となった。4で述べたように、クマリはダサイン祭の期間に仏教徒のシャーキヤの家庭の少女たちから選出される。ダサイン祭では多くのヤギや水牛が首をはねられ犠牲にされるが、その光景を見ても恐怖心を見せない少女がクマリにふさわしいとされている。このような場面において、クマリはドゥルガー女神、とりわけ水牛の魔神を殺すマヒシャースラ・マルディニーと見なされている。

ここでは、このようなクマリがネワール仏教徒であるシャーキヤの家庭から選ばれるという事実注目しよう。ヒンドゥー教の女神と同一視されるクマリが仏教徒の家庭から選ばれるという点は、上に述べたようなカトマンドゥ盆地にしばしば見られるシンクレティズムの一例に思われる<sup>33</sup>。確かに、クマリはヒンドゥー教徒にとってはドゥルガーであるが、仏教徒にとっては仏教の女神ヴァジュラ・デーヴィーであり、上に述べたシンクレティズムと同様の形態をなしている。しかし、それだけで解決できる事象であろうか。

ネパールは、古くからヒンドゥー教徒の歴代の国王に統治されてきた。そのような環境はネワール仏教徒にとってある種の軋轢となり、支配者に対し不満が全く無かったとはいえないであろう。彼らにとって、それらの不満を解消する何らかの社会的装置が必要だったのではないかと考えられる。ヒンドゥーの女神ドゥルガーであり王家の守護神タレジュとも同一視されるクマリが仏教徒から選ばれ、インドラ・ジャートラ祭において王家の守護神タレジュとして国王からも礼拝される、という場面を見て仏教徒たちはある種の満足感を覚えたのではないだろうか。また支配者側としても、常に被支配層であったネワール仏教徒たちの祭礼における「ガス抜き」としての機能をロイヤル・クマリに求めていたので

---

<sup>33</sup> Majupuria, T.C. & Majupuria, R.K. (2004 : 254-255) は、クマリ信仰をシンクレティズムの一例として紹介している。

はないかと思われるのである<sup>34</sup>。すなわちこの局面において、ロイヤル・クマリは女神という象徴的存在として、ネワール社会におけるヒンドゥー教徒と仏教徒の平和的共存に貢献してきたと言えるであろう。

次に、インドラ・ジャートラ祭におけるクマリの山車巡行に着目してみよう。クマリの巡行を最初に行ったのは、18世紀、カトマンドゥ・マッラ王朝最後のジャヤブラカーシャ・マッラと言われている。彼は、ゴルカのシャハ王朝がネパールを支配する以前のカトマンドゥを支配した最後のネワール族の王である。彼の時代、ゴルカのプリティヴィ・ナラヤン・シャハがすでにカトマンドゥ盆地に侵攻しつつあった。盆地において古くから都市文明を築いてきたネワール民族が異民族に侵略されようとしている最中に、このクマリの巡行の行事が始められたのである。筆者はこの巡行の行事は、迫りくるゴルカ人たちに対峙するためネワール人の結束を図る目的で行われたのではないかと推測する。ヒンドゥー教徒からも仏教徒からも生き神として信仰されるクマリの巡行に民衆たちが熱狂し、ネワール社会の絆が深まるであろうことは容易に推察される。

4で挙げた伝説によれば、巡行は1756年に開始されたという。すでにその10年以上前から、ゴルカはカトマンドゥ北西のヌワコートを始めとするカトマンドゥの周辺地域を掌握し始めていた<sup>35</sup>。クマリがジャヤブラカーシャ王の治世の終焉を予言したという伝説も、このような史実を踏まえてのことであろう。このような危機的状況下で行われたクマリの巡行の背後に、異民族の侵入に対してネワールの結束を図ろうとする国王の政治的意図を想定することは可能であると思われる。

1768年、プリティヴィ・ナラヤン・シャハはインドラ・ジャートラ祭の最中にカトマンドゥに侵攻し、翌年ネパールを統一し新たなゴルカの王朝を開始した。マッラの三王朝は滅んだが、クマリ信仰は生き残った。ゴルカの新王も、生き神クマリをドゥルガーの化身、また王家の守護神タレジュとして礼拝したのである<sup>36</sup>。これはクマリと同一視されるドゥ

<sup>34</sup> (山口 2010 : 207) 参照。

<sup>35</sup> (佐伯 2003 : 381-384) 参照。

<sup>36</sup> (田中・吉崎 1998 : 225) によると、クマリの山車巡行の際侵攻してきたゴルカ王にクマリは祝福のティカを授けたという。

ルガー女神がヒンドゥーの大伝統に位置する女神であり、民族を超えて信仰される存在であるということが理由として挙げられるであろう。またゴルカの王も、被支配層であるネワール人たちが多数居住しているカトマンドゥ盆地を平和的に統治するために、クマリ信仰をその手段の一つとして利用したとも思われる。この点においてクマリ信仰は、異民族同士の平和的共存のための効果的な装置としても機能したと考えられる。

## 結び

以上、カトマンドゥ盆地における生き神クマリの宗教社会的機能について述べてきた。クマリはヒンドゥー教の女神ドゥルガーと同一視されるが、ネワール仏教徒の家庭から選出される。元来処女神としてのクマリ信仰はローカルなものであったと考えられるが、後にヒンドゥーの女神ドゥルガーと、またさらに王家の守護神タレジュの信仰と結びついた。このような重層的な女神のイメージを通じて、ネワール社会においてクマリは聖性を高めていき、ヒンドゥー教徒と仏教徒の共存の手立てとしての役割を果たすようになった<sup>37</sup>。さらにクマリ信仰は民族間の垣根を超え、カトマンドゥのロイヤル・クマリはネワール人のみならずゴルカの王にも礼拝されるようになった。ここにおいてクマリは、いわばトランス・エスニックな存在となり、異民族同士の平和的共存の装置としても有効に機能することとなったと考えられる。

現在連邦民主共和国となったネパールでは、王政は廃止されたがクマリの制度は存続した。インドラ・ジャートラの際ロイヤル・クマリは、国王ではなく大統領にティカを授ける儀礼を行っている<sup>38</sup>。ネパールの歴史の中で多宗教、多民族の共存に貢献してきたと考えられるクマリが、今後のネパールにおいてどのような役割を担っていくのかが注目され

---

<sup>37</sup> (シャキヤ 2014) には現代のクマリの状況についての詳述があるが、そこで「現在の生き神クマリ信仰は宗教共存、共生のシンボルになっていることに異論はないであろう」と述べている (p.306)

<sup>38</sup> (シャキヤ 2014:293) 参照。ネパールが大地震に見舞われた後、2015年のインドラ・ジャートラの祭礼においてクマリの巡行がどのように行われたかは未確認である。

る。幼い少女を隔離し特別な環境で生き神として育てる、という伝統的な習慣に批判的な意見もある。生き神クマリのような宗教的聖性を持つ存在が、合理性を追求する現代において社会と矛盾なく存在し続けることが可能なかどうかという点に関しては、また別の機会に考察したい。

### 参考文献

- Allen, Michael. 1996. *The Cult of Kumārī, Virgin Worship in Nepal*. (Third Revised and Enlarged Edition) Kathmandu : Mandala Book Point.
- \_\_\_\_\_. 2000. "Kumārī or 'Virgin' Worship in Kathmandu Valley." *Sydney Studies in Society and Culture* 19 : 182-210.
- Amatya, Gehendra Man. 1998. *Religious Life in Nepal*. Kathmandu : Amatya Publishers.
- Anderson, Mary M. 1988. *The Festival of Nepal*. Calcutta : Rupa & Co.
- Gellner, Devid N. 1992. *Monk, Householder, and Tantric Priest, Newar Buddhism and its Hierarchy of Ritual*. New Delhi : Cambridge University Press.
- 前田知郷 2009 「ダサイン祭におけるクマリー・プージャー」『東海仏教』54 : 80-96.
- Majupuria, T. C. & Majupuria, Rohit Kumar. 2004. *Religions in Nepal*. Kathmandu : Modern Printed Press.
- Nepali, Gopal Singh. 1988. *The Newars*. Kathmandu : Himalayan Booksellers.
- 佐伯和彦 2003 『ネパール全史』明石書店.
- シャキヤ スダン 2014 「生き神クマリ信仰から見るネパール仏教」『龍谷大学アジア仏教研究センター ワーキングペーパー』13-7 : 292-306. ([http://repolib.ryukoku.ac.jp/jspui/bitstream/10519/6055/1/r-barc-kh\\_2013\\_024.pdf](http://repolib.ryukoku.ac.jp/jspui/bitstream/10519/6055/1/r-barc-kh_2013_024.pdf), 2015年11月2日閲覧)
- 田中公明・吉崎一美 1998 『ネパール仏教』春秋社.
- 立川武蔵 1990 『女神たちのインド』せりか書房.
- \_\_\_\_\_. 2008 『インド神話の神々』せりか書房.
- 山口しのぶ 2005 『ネパール密教儀礼の研究』山喜房佛書林.
- \_\_\_\_\_. 2010 「カトマンドゥ盆地に生きるネワール人の仏教」木村文輝編『挑戦する仏教』法蔵館.